

春風秋霜 9月号

令和元年9月1日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 夏休みの後の生活について

今年の夏休みは、台風の影響による水難事故や熱中症による死亡事故が全国各地で発生しましたが、島田市の子供たちが大きな事件事故に遭遇しなくてよかったですと思います。各学校において事前の指導が充実していた成果だと思っています。

9月初旬の天気予報を見ると、30度を超す高温の日がまだ続くようです。暑さに対しては、十分な配慮が必要です。特に、中学校においては体育大会の練習も行われます。熱中症対策は十分にしたいと思っています。

新学期が始まり、生活のリズムが整わない子供も予想されます。また、課題が提出できなく悩む子供もいると思います。このようなことを起因とした不登校の増加も心配されまます。生活リズムも課題の提出も大切なことですから、全員に指導することは必要ですが、個に応じた配慮も大切にしたいと思っています。

2 学校統合について

該当地区の自治会役員やPTA本部役員・校長などのメンバーにより協議され、平成30年9月に提出された教育環境適正化検討委員会の提言書には、子供を最優先にした学校づくりという副題が付いています。

この子供を最優先という考えは、島田市の統合を考える上での重要なポイントです。学校統合を議論すると、統合より地域の活性化を優先すべきという意見が必ず出されますが、その対策の具体化や効果の検証には時間がかかります。そのため、適正化検討委員会では、地域の都合より子供たちの教育環境を優先すべきという考えが共有され、提言書がまとまったのです。

それぞれの学校では、素晴らしい教育実践が行われています。小規模校には小規模校のよさがあり、大きな学校にも大きな学校の素晴らしさがあります。しかし、適正化検討委員会は、これからの変化が激しく、グローバルな社会で生活しなくてはならない子供たちにとっては、切磋琢磨する場や多様な意見に触れる場、コミュニケーション力をより養える、ある程度の規模を有する学校で学ぶことが必要であると判断したのです。

これまで、北中学校の1年生の保護者から反対の意見を頂いていますが、統合案には賛成者も多く、地域からの反対も少ないので、原案通り湯日小学校と北中学校は令和3年4月に、北部4小学校は令和6年4月に統合することとします。関係校については、今後カリキュラム等検討委員会において、子供たちの不安軽減のための提案がなされますので、ご理解とご協力をお願いします。

3 防災訓練に参加して

8月25日(日)に地域の防災訓練に参加しました。大変多くの地域住民が参加し、初期消火・炊き出し・救護など、様々な訓練をしました。近年、私は、市本部の訓練と重なっていたため、地域の訓練には参加できませんでしたが、今回参加して中学生の活躍が目を引くと思いました。



訓練が始まる前に、中学生だけ集め役割を分担したため、それぞれの生徒が自分の分担

を自覚していたので、中学生の動きが目立ったのだと思います。避難所では中高生が戦力という話をよく聞きます。中高生はやるべきことがはっきりしていれば、力を発揮するのだと思いました。

相賀地区では夜間訓練が行われました。災害時には夜間の対応も求められますから、夜間の訓練は欠かせないと思います。写真のようなバケット付きの消防車による、高所からの救出訓練もあり、参加した多くの子供たちにとって、貴重な体験になったと思います。防災訓練に参加した子供たちには価値付けをお願いします。



4 市長表敬から

最近、全国大会出場者の市長表敬が続いています。市内に、全国大会出場者が大変多いことは素晴らしいことだと思います。地方大会を勝ち抜き全国への切符を勝ち取ることは大変ですが、出場することによって得るものは大きいと思います。

表敬者との話し合いの中で、共に取り組んだ仲間への感謝や、強い相手と戦う中で自分を見つめ直したことなど、成長に結びつく内容を聞くことができました。強い心の育成につながる挑戦する勇気や、継続した努力をする強い意志などが聞けたこともうれしく思いました。

肘かけ椅子

大石 剛寿 教育部長

『高校野球について思うこと』

今年も夏の甲子園が終わりました。地元の島田商業は昨年につき、あと一步のところまで甲子園には届きませんでした。高校生たちのひたむきさと1球にかける真剣さ、負ければ終わりという刹那さは私たちにいくつもの感動を与えてくれました。

さて、少し前になりますが、岩手県予選で最速 160km を投げる大船渡高校のエース佐々木朗希投手が甲子園の懸かった決勝戦に出場せず、敗れたことが話題になりました。それまでの疲労の度合いから、故障のリスクが高いと判断して監督が決定したことでした。このことについては賛否両論、喧々諤々とメディアで議論されていましたが、野球に限らず現役のスポーツ選手からは総じて英断だったとして支持されていたようでした。対して批判的な意見を言うのは、既に現役を退いて何年も経った所謂、根性論で現役時代を過ごしてきた人達でした。こうした人達は指導者になっても、自らがそうされてきたように選手に無理を強いることが多く、最悪、故障させてしまうケースもあるようです。実際にプロ野球選手などが受ける有名なひじの手術（通称トミー・ジョン手術）を施術しているある病院では過去 10 年間で 600 件の手術の内、約 4 割が高校生以下で、中には小学生もいたとのことでした。

選手たちにとって、甲子園は夢の舞台かも知れませんが、それは一瞬で、その先の競技人生の方がよほど長いのです。まして活躍の場は今や世界にまで広がっており、それだけの逸材を預かった指導者は、目先の勝利だけでなく選手の将来に配慮することも求められます。今回のように一監督或いは一選手に決断した責任を負わせるのはあまりに酷であり、大会運営者は球数制限などをきっちりとルール化して、システムティックに欠場させる仕組みを整えるべきだと思います。

野球人口が減少している今、選手はある意味財産だとも言えます。その財産を守るためにも、選手ファーストの改革が早急に進むことを一ファンとして望んでいます。